

近代医療の一端を見る

■疱瘡

山崎家は、江戸時代中期にこの地へ来て以来、代々医と農を営んできた。

「種」て後、三十日の間は、飲食養生、常の疱瘡のごとくきびしく慎むべし「食餌べき品……」種痘の心得―版木の文面の一部

この心得書は、設楽町津具字中野沢の医師山崎讓平（一八一六～一八七八）が用いたものである。讓平の日記「日知録」は、農事的記録が中心であり、医業に触れるところは少ないが、安政二年（一八五五）の所々に種痘の記録が散見される。

「正月十八日、黒川下男に種痘致す。」二月十一日、柿平与之助子・二人、権次郎娘・三人、種痘致す。」等々。讓平がどこで種痘を学んだかは、当初、不明であったが、難波抱節に牛痘法（牛に発生する痘瘡で、この痘毒を種痘に利用）を習ったことが確認された。

岡山市から北へ十数キロメートル・旧津山街道の宿場町・金川に住んでいた抱節から、その医師がどのようにして遠方まで伝わり、讓平がはるばる遊学していくまでに至った経緯について探ってみた。難波抱節は、華岡青洲（紀州の外科医）の門下生として知られた人で、寛政三年（一七九二）岡山に生まれ、岡山藩の家老日置氏の侍医・難波経寛の養子となり、華岡塾で青洲から、牛痘法の伝授を受けていた。讓平は、この門を叩いて、抱節の門下生となり、牛痘法

の伝授を受けたのである。

疱瘡は天然痘ウイルスによっておこる悪性の伝染病で、日本では今はなくなつたが、昔はどの国でも大流行を繰返し多数の死者を出した。一七九六年英国人ジェンナーが創始した種痘が普及し、一九世紀以降その惨禍は激減した。

種痘による免疫効果は漸減するもので、小児期に定期的に種痘を受けることが法律で定められて私たちも行なつてきた。子どもの頃には、いやなことであつた。小型のメスで、出血しない程度に、長さ五ミリ位・十文字に切皮し、痘苗をすり込んだ。接種四〜五日目頃から赤くはれ、やがて中心部が水泡となり二〜三週間をかさぶたがとれて治つた。

ジェンナーの発見した牛痘接種法は、安全率が高く、ヨーロッパに普及したのは一八一六年頃であるという。日本には、オランダの医者モニケが一八四九年、子どもに接種して成功したのが始祖といわれている。牛痘を人の皮膚に接種して、その部分だけに痘皮を生じさせるだけのことで、痘瘡に対する免疫が得られることを証明して以来、痘瘡の安全な予防法として広く行なわれるようになった。一九七七年アフリカのソマリアで最後の患者がなくなり、世界中で撲滅宣言が出されている。

日本で接種法が成功した数年後「日知録」に、讓平が種痘の技術をこの津具の地で活用したことを記してある。知識の交流に時間や手間のかかる当時の社会環境下にあつて、極めて早急に、画期的対応がなされたのであつた。

■病理解剖

司馬凌海（一八三九～一八七九）は、師の松本良順に従つて、長崎でボンベに蘭学を学び、日本へ近代西洋医学導入の基礎を築いた天才といわれている。

明治九年（一八七六）五月愛知県に赴任し、後藤新平（後の愛知県学校長、東京市長）等と外国語の履修に励んだ。兩人は、名大医学部の前身にあたる医学講習所、愛知医学校と医学部付属病院の前身である愛知病院に勤務して、ともに名古屋の医学・医療の基礎造りに大きな貢献を果している。

凌海は名古屋に着任して間もない明治九年七月、旧北設楽郡上津具村の芦沢金作の妻の往診を愛知県から命じられ、日本人として最初の病理解剖を行なつていた。

患者は、腹部に疼痛を伴う異常膨隆があり、病名不明であつた。凌海は弟子を伴い、名古屋から駕籠に乗り、二泊三日を要し上津具まで到着したが、到着時には患者はすでに死亡していた。

凌海は病歴から子宮外妊娠と診断し、解剖を申し入れた。親族了解のもとに急遽解剖を行なつた結果、子宮外妊娠による石胎であつたと判明した。この剖検は、愛知県における最初の病理解剖であるのみならず、日本人による病理解剖の第一号例であつた。

現在、津具字釜石七番地に愛知県が建立した墓石が存在している。墓碑の側面に「明治九年七月三日」「愛知県建立」と記してある。

凌海は、明治十年九月、愛知医学校との契約が切れた。同年十月の月給は、凌海が二五〇円、後藤

新平が一〇〇円であつたという。凌海は破格の高給とりであつたため、県が契約の更新を断念したものとされている。辞職後は、名古屋市内で開業し、「門前市をなす」程に多数の患者が来院したという。

名古屋大学医学部名誉教授高橋昭先生より、「西洋医学の権威であつた医師凌海が、当時の社会環境にあつて、日本人最初の病理解剖を寒村の津具まで行つて執刀したのはどうしてか？ 経緯を知りたい。」との調査依頼があつたので、その手がかりを探つてみた。

一言に言えば、（近代医学に立ち向かう山崎一族の情熱）である。

「難波抱節に師事して種痘を山村に普及させた山崎讓平医師・病理解剖への道筋を開いた山崎珉平医師」

山崎家の四代目玄節の時代に三男が分家して上津具で医業を行なつていた。子孫である父親謙吾は、技術を磨くために、長男珉平（一八六〇～一九四〇）を碧南の後藤担平医師の門下生にして修業させた。

担平は司馬凌海とは同門で、長崎でオランダ医学を学んだ。二九歳のとき洋々医館を開設、最新の洋式医学による診療を行い、三河地区最初の総合病院となり多くの患者が遠方から訪れた。

憶測してみると、師の担平に弟子の珉平が「津具の芦沢しまの病状を常に逐一細々と申し述べた」とものと思う。

師の担平は、弟子の精密な病状報告を頭中にくぐらせていて、自分と同様に松本良順医師を師とする司馬凌海に語りかけていた。そ

れを受けて「芦沢しまの病状の研究明こそ、今後の医学の本道だ」と感じとり、愛知県の医師会に出張診断の必要性を強力に訴えかけたと思われる。

その結果、凌海は名古屋に着任して間もない七月一日「上津具村芦沢金作の妻しま」の往診を愛知県から命じられたのであつた。

この題材については主題者の末裔、その家族も現住しており、既存の資料や文献を参考にしたり、また、憶測の部分もありますので、異論があればご教示願えれば幸いです。

（設楽町文化財保護審議会委員）

三浦 茂美

訂正：後藤担平 近藤担平